

昇華の価値論

堀川 聡司

1. はじめに ―昇華理論における価値の問題―

本稿は、精神分析固有の概念である「昇華」について、「価値」という視点にとりわけ焦点を当て、その理論的側面を探求する一つの試みである。

精神分析の世界に昇華という語が登場したのは、1905年、Freud, S.の『性理論三篇』の中でのことだが、その定義とは、「性欲動（リビドー）が、抑圧されることも神経症症状を作ることもなく、非性的な対象へと導かれ、社会的・文化的に価値あるものへ転換されること」である⁷。

この概念の起源として、Laplanche, J. & Pontalis, J. B.は、西洋哲学における「崇高」と錬金術における「昇華」の二つを連想しているが¹⁰、Freud, S.にとっての昇華の概念とは、まさに崇高で輝かしい人間の営為を説明するためのものであった。精神分析の創始者である彼は、性欲動を基盤に据えて自らの理論体系を構築しようと試みたが、昇華はいわばその一つの応用である。つまり、抑圧されれば、様々な神経症症状を形成するリビドーも、場合によっては社会的・文化的に高く評価される高尚なものに変貌することがありうるのである。これによって、神経症などの精神病理からは一見縁遠いように見える芸術活動や知的生産が、フロイトの性理論の範疇に含みこまれた。Freud, S.が生涯にわたって、過去の偉人、天才的な芸術家に敬愛の念を表し続けていたことに鑑みれば、それは一つの理論的な到達点だったと言えるかもしれない。

ところで、昇華の概念には上記のような天才論を語る視点や病理学的視点の他にも、個人の内的な心のプロセスと、社会・文化といった個人の外的な環境とをつなぐものとして位置づけられる点にも概念としての魅力があるように思われる。それは、ある個人が、生物学的な欲求や心的な願望と、現実で生きていく上での要請とをどのように妥協させてゆくかという事柄である（これは二次過程あるいは現実原理などと関連深いことである）。このような意味で Lagache, D.は昇華を「防衛機制」ではなく「解放機制¹」と捉えている¹⁵。防衛機制は、Lagache, D.によると、快原理に従って内的緊張を早急に軽減することを目指すものであるが、解放機制は現実原理にも関与しつつ、ある程度の緊張の増大を冒しても可能性の増大を目指す（それにより反復強迫的な疎外の同一化から解放される）。昇華とは、受け入れがたい欲望が、社会的・道徳的に認められる価値をもった対象や目標の中に出口を求めるプロセスであるので、まさしく快原理と現実原理の狭間で幸福な解決策を

¹ 解放機制(mechanism de dégageement, working-off mechanism)の考えを導入したのは反復強迫について省察した Bibring, E.であるが¹⁾、Lagache, D.は防衛機制と対比させる形で理論的發展に寄与した。

見出す解放機制なのである。

これらの視点は、臨床に携わる者にとっては、常日頃からの関心の的になっているものと言えるだろう。少なくとも力動的な視点をオリエンテーションにしている治療者は、クライアント／患者の内的な心の世界に最大の関心を払う一方で、その人が社会・文化の中でどのように生きていくかも常に念頭に置く必要があるからである。

しかしながら、昇華の概念は曖昧な点が多く、Freud, S. 自身まとめた論考を書くことがなかった上、後世の分析家は、Freud, S.が想定していなかった範疇にまでその意味合いを広げた。それゆえ、現在に至るまで昇華理論の実態は把握し難い状況となっており、それぞれの分析家が様々な現象や臨床経験をこの語で表現し、その文脈に応じた理論的な考察を行っている。一貫した心的メカニズムや定義を提示することは一筋縄ではいかない問題を孕んでいる。『精神分析用語辞典』¹⁶⁾の昇華の項目には、「この概念は、それがないと不具合に見舞われるような、学説上欠かせない一つの前提となっている。昇華に関する一貫した理論がないということは、やはり精神分析の欠陥の一つである」(p.467)と記述されているほどである。そして、この辞典の著者の一人である Laplanche, J.は、8年後に取り組んだ昇華に関する講義¹⁷⁾の中で、「メタサイコロジー」と「価値論」の二つを昇華理論の問題点として挙げた (p.20)。

第一のメタサイコロジーは要するに、欲動が昇華という一つの運命を辿るのはどのようなメカニズムとして説明できるか、という問いである。彼は二期の講義を通して、この点に関する徹底的な Freud, S.読解を行っている。

第二の価値論に関わる課題とは、昇華のそもそもの定義に含まれている「社会的・文化的に価値あるとされるもの」という部分に関係することである。

社会や文化が決定する価値とは一体何であろうか。それは明示されるものでもなければ、一義的なものでも決していない。価値観は、時代的・地域的な背景に左右されざるをえないため、ある時代やある地域では昇華と考えられていたものが、別の時代・文化ではそうならない場合も考えられる。さらに、同じ時代・地域であったとしても、価値を評価する者が変わればその結果はいかようにも変わりうる。先に昇華が「個人の内的な心的プロセスと、社会・文化といった個人の外的な環境とをつなぐもの」であることに触れたが、前者についての明快な定式が存在したとしても、後者の要素が極めて文脈依存적であるため、「社会的・文化的に価値あるもの」という点から、ある現象を昇華かどうか判断するのは常に困難を伴う。

例えば、今日名作といわれるような芸術作品が、その当時は見向きもされなかったというエピソードはしばしば耳にする。近代絵画の到来を告げたと今では見なされる『草上の昼食』や『オランピア』が発表された時、作者のエドゥアール・マネは、世間から激しいスキャンダルと反感で迎えられた。その時代の感覚ではまるで価値のない代物であっただけでなく、人々を大いに不愉快にさせたのである。反対に、存命中は絶賛された芸術家や学者が、時の流れとともに忘れ去られてしまう例は枚挙に暇がない。

また、いささか卑近な例になるが、喫煙は果たして昇華の産物と言えるだろうか。Freud, S.も述べているように⁷⁾、煙草や葉巻は、原初的には母親の乳房や母乳から満足を得ていた口唇期欲動が別の手段によって代理の満足を得る手段と考えられる。煙草や葉巻は人間社会の中で世界的に普及している嗜好品であり、文学作品や演劇などにおけるその象徴的な用途は数えきれないほどある。

しかし他方で、昨今は喫煙の人体に対する有害性が周知されるようになり、禁煙を促す運動が世界的に広がっている。煙草は高い評価を得どころか、敬遠され拒絶される対象になりつつある。喫煙が昇華であるか否かを判定するためには、果たしてどの基準に準拠すれば良いのだろうか。

本稿では上記の問題、すなわちある現象が昇華となるための価値基準は何か、という問題については保留にしたい。それについて判断を下すためには、各々の事象について時代や文化の特性を検討する必要があり、倫理学や道徳の問題へもその射程が広がってしまうからである。筆者が試みたいのは、「社会的・文化的に価値あるとされるものを一人の個人がどのように取り入れ、最終的に昇華という心的過程へ用いるようになるのか」という点について考察することである。本稿で言う「価値論」とは、このような問いに関する論を指している。その際、それに関連する議論を行った様々な精神分析家の見解を参考にしてみたい。これはいわば「メタサイコロジー」と「価値論」の双方に関わる問題と言えるだろう。

さらには、このような考察を通して、一貫した定義が困難な、複数の分析家が述べている昇華理論を識別・区別する視点の寄与も試みたい。

ところで、こうした価値の問題についての考察は、昇華の理論的探究の枠を超えた意味合いが含まれている。Lagache, D.も、価値の問題は精神分析、とりわけ臨床的な視点をもった精神分析において非常に重要な観点であると述べている¹⁵⁾。まず、精神分析家などの治療者は一定の社会的・文化的視点をもっていなければならない。それは守るべき倫理観を持っていることであり、また現実検討能力を備えていることでもある。また、患者・クライエントの抱く価値観、何を良いと思っていて何を悪いと思っているかも治療上重要な素材である。治療の経過を通してその価値観が変容するかもしれないし、そもそも抱いていた価値観がどのようにして個人史の中で形成されてきたのかを探求することが必要になるかもしれない。個人の外部に位置付けられるある価値観がどのようなメカニズムでその個人に内在化されるかを考えることは、このような意味でも意義深いと言えるだろう。

それでは次節より、昇華の価値論について述べた精神分析家の見解を概観してゆこう。

2. 自我理想の働き

Freud, S.はほぼ全時期に、昇華を限られた人間、一部の天才にしかできない営為だと考えていたが²、何を基準に高尚と言えるか、天才的と言えるかについてはやはり詳細には検討していない。しかし、昇華のメカニズムにおける価値に関する問題については、「自我理想」を巡る議論の中から見いだせるものがある。「ナルシズムの導入にむけて」⁸⁾を筆頭に、中後期のFreud, S.のメタサイコロジー論の中には、ある種の社会的理想が主体の中に取り込まれ、その後、自我理想という心的審級を形成するという力動論が展開されている（逆に言えば、初期のFreud, S.には価値論に関

² 精神分析における昇華理論の変遷を辿るにあたって、昇華という言葉によって指されているものが、Freud, S.のそれよりも大分拡張されるようになったことには注意しなくてはならない。Freud, S.の言う昇華は、芸術家が大成することを指しているような印象を与えるが、後世の分析家のほとんどはすべての人間に開かれた心的過程であると考えようになった。また、Klein, M.などは、子どもが成長する一つ一つのプロセスこそが昇華であるとみなしており（例えば、破壊的な遊びが創造的な遊びに変わることなど）¹¹⁾、Dolto, F.に至っては、人間が誕生し、世界の一員となることを最初の昇華とみなしている⁴⁾。

する考察は見出せない)。

自我理想が、一定の価値観や社会的な判断志向を個人にもたらし、昇華のプロセスに関与する審級である旨は Lacan, J. も述べているが¹³⁾、Nasio, J. D. はさらに緻密な読解を披露しており、結論として次の二つの役割が存在することを指摘している¹⁹⁾。

彼によれば、自我理想の第一の役割は、「昇華過程を始動させる起動装置」となることである。昇華の動きが始まると、最初のうちは自我理想が作品創造への気持ちを誘発するが、やがてこの創造的情熱が次第に自我理想から離れ、自立してゆく。Nasio, J. D. は「症例ハンス」において、ハンスが音楽に傾倒していった様を引き合いに出しながらこのことを説明している。ハンスの場合は父親が求めてきた音楽が自我理想となっており、次第に音への純粋な愛が芽生え、最終的には理想的なものを基準とし、あらゆる規範や抽象的価値を求める気持ちが創造活動の素材と結びつき溶け合っていた。

自我理想の第二の役割は、昇華の動きに一定の制約を加え、方向づけを与えることである。自我理想の存在によって、欲動の矛先は性的満足ではない非性的満足へと逸らされ、そのような方向へ進むことが促される³⁾。

3. 自我心理学における展開

同様の心理メカニズムを想定した分析家としては、昇華を防衛機制の一つ、それも健康な人物が主に使うことのできる防衛機制として捉えた Freud, A. がいる。彼女は、「昇華、すなわち本能的な目標をより高次の社会的価値に合致するものへと置き換えるためには、そのような価値の承認、少なくともそのことについての知識が前提にある。すなわち、超自我の存在が前提にある。したがって、抑圧や昇華という防衛機制が作動するのは、発達プロセスの比較的後期になってからである」

(p.56) と述べている⁴⁾。ここで注目したいのは、Freud, A. がメタサイコロジーの前提として、Freud, S. が『自我とエス』⁹⁾以降体系化した第二局所論に準拠しているという点である⁴⁾。すなわち、その理論的基盤にある種の自律性を持ち、独立した主体性を有する自我の機能を想定しているのである。

自我心理学ではその後、自我の自律性の大きさをますます拡大して捉えるようになっていき、Hartmann, H. に至っては、葛藤や不安に影響されることなく自律的に働く健康な領域、すなわち葛藤外領域が、先天的・生得的に備わっていると考えた。昇華理論もそれに呼応する形で理論的修正がなされ、価値観の問いに関しても、自律性をもつ自我が（健康に生きる術を生得的に知っているのと同様に）、価値基準や本能（欲動）を導く方向を把握しているとみなすことが可能になった¹⁰⁾。

昇華理論における価値論の探求が自我心理学の中で熱心になされなくなった背景には、当時教科書とも言われた Fenichel, O. の『The Psychoanalytic Theory of Neurosis』の存在も無視できない。彼は昇華を特別なメカニズムではなく、「適応的に働いている成功した防衛(successful defenses)」

³⁾ Nasio, J. D. は多少触れているに過ぎないが、最初作品創造への気持ちを誘発していた自我理想も、昇華のプロセスが進展するに従って、そこから離れてゆく点には注目したい。自我理想は昇華の過程の始動点であり、方向づけを行うものだが、昇華の結果はその理想とは同一のものとは限らない。それどころか、昇華は理想を諦めてゆく過程と言っても良いかもしれない。

⁴⁾ 自我理想と超自我の区別については、精神分析史の中で様々な議論がなされているが、本稿では紙幅の都合上、それらに言及することができない。

のすべてを指すものとして規定した⁵⁾。これに基づけば、抑圧、反動形成、知性化などといった防衛は神経症の原因ともなるが、それらが社会適応的に機能した場合、それは結果的に昇華であるとみなすことができる。すなわち、人間に関わるある現象が昇華であるかそうでないかは、それが成功しているかどうか、適応的かどうかにかかっている（防衛が適応に失敗した場合は神経症や精神病になる）。欲動は内的なプロセスとして様々な運命を辿ることが想定されるが、それがどのようなプロセスであったかは差し当たり不問にされる。但し、ここでも“何をもって適応的というか”という価値基準については言及されておらず、Fenichel, O.自身、「昇華の定義に含まれる価値の要素は除外した方が良い」（p.141）と述べている。

自我心理学では『自我とエス』以降の Freud, S.の第二局所論を引き継ぐ形で、(Hartmann, H.のように) 昇華における攻撃性の問題や中和の概念を発展させはしたものの、昇華を病理とは対極の“健康で適応的なもの”の場に固定してしまったためか、それ以降、価値の問題はもとより、昇華理論そのものの発展があまり見られなくなった。

4. エディプス・コンプレックスの克服

次に、自我理想の議論から出発して、結論として昇華の条件とは“エディプス・コンプレックスを克服しているか否かである”と考えた Chasseguet-Smirgel, J.の見解²⁾を見てゆこう。彼女は真の創造性をもたらす心的過程としての昇華を特権的に捉え、それとは似て非なるものを捨象してゆく論を膨大な文献読解と共に展開している。

彼女がまず注目したのは、Freud, S.が「ナルシズムの導入にむけて」⁸⁾で昇華と理想化とを厳密に区別している箇所である（p.94-95）。それによると、理想化は対象の本性を変えことなく肥大化し心的に高められるものであり、「自我の諸要求を強め、抑圧の最も強力な援護となる」。これは、前後の文脈から判断するに、人が幼少期に一度享受した満足を手放すことができずにいるために、ナルシス的な完全性を維持しようとする心の働きと言えるだろう。そのような点で、性的満足から離れて別の目標へと突き進む昇華とは一線を画す。

Chasseguet-Smirgel, J.は以上を踏まえた上で、昇華が十分な脱性化が果たされ、真の創造性をもたらす、本質的な本能の変容があるものである一方、理想化が真の脱性化が不在で、偽りに上乗せをした、障害から単に逃れる試みだと区別した。この背景にあるのは、父への同一化が果たされ、エディプス・コンプレックスを乗り越えているかどうかの違いである。すなわち、近親姦の欲望を諦め、父親のファルスを内在化し、そこで獲得した価値基準に基づいて、創造的な活動を進めてゆくことこそが昇華なのである。彼女は昇華をこのような特別な心的機制として措定した上で、世間で言われている多くの芸術作品、文学作品の中には、真の昇華とは言えないものが相当数にのぼると指摘する。彼女がそのように言うのは、偽りの成熟をした人間がみな、去勢を否認し、エディプス状況を度外視した生き方を選択しているからである。エディプス・コンプレックスという、人間が否応なく乗り越えなくてはならない心的な課題を克服することを通して初めて、人間社会において生きてゆくために必要な心的な構造が形成される。昇華における価値はそこに基いて決定される。彼女のこの長い論文が、「昇華における社会的価値は本質的に内的な要因から生じているのだろう（p.146）」という一文で締めくくられているのはそのような意図が込められているのだろう。

5. 象徴産出的去勢

前節の Chasseguet-Smirgel, J.の考えている昇華の特徴は、昇華とはエディプス期の課題を乗り越えて果たされるとしているところである。本節で見る Dolto, F.⁴⁾の昇華も、人の心の成長過程で遂げられるものとして考えているが、彼女の場合はそれがなされうる時が一つに限定されていない。

さて、Dolto, F.の昇華を述べるためには、まずその生成に必要な「象徴産出的去勢」について言及しなくてはならない。彼女は Lacan, J.同様、去勢が人間にもたらす肯定的な側面を強調した分析家であるが、彼女による去勢の定義とは、“自分の望む形で欲望を満たすことが他者から「掟」によって禁じられていること知り、それを受け入れていく心的な過程”である。掟はある意味では、それまでの満足の手段を奪い、不自由かつ欲求不満に陥らせるものであるが、別の視点から見れば、社会共同体内での主体的行動を高め、文化的活動を促進させることにもなる。つまり、ここで言う掟とは、単に何かを禁止するだけのものではなく、それによって、子どもが世界に生きる人間として成長させるものでもある。

赤ん坊の離乳を例にして考えてみよう。もともと乳児は、食欲などの原初的な欲求を身体的な水準で、直接的に、すなわち自分の口と母親の乳房（母乳）との接触によって満足させる術を知っている（こうした快の獲得の在り方を「短絡路(circuit court)」による満足と言う）。しかし、離乳期を迎え、養育者の手によってそれが禁じられると、そうした快の手段は失われ、子どもは極めてフラストレーティブな状態に陥る。ただ、それによって代わりとなる満足を見出すことも可能となり、これまでは口にすることもなかった様々な食事を摂取することもできれば、食を通じた多様な食文化・マナーなどを通じて多くの人と関わるができるようになるかもしれない。この際の養育者の行為、乳房を提供することをやめ、異なるあり方による満足の獲得を促すことが、子どもに対する去勢である。

メタサイコロジ的に記述すれば、去勢とは、一次的に欲動を満足させていた回路を断ち切り、結果として「迂回路(circuit long)」の経路を強いるものである。欲動が迂回路を通して満足を得ることは、元々の満足の目標が象徴的に置き換えられたことを意味するので、Dolto, F.は、去勢には象徴性を産む側面、つまり象徴産出的(symboligène)な側面があるとした。そして、このような経路で象徴的な目標を達成することこそが昇華である。

ところで、子どもにもたらされる去勢は、それぞれの発達段階に固有のものがああり、そこから得られる昇華の種類もまた複数存在する。それらは発達順に、臍帯去勢、口唇期去勢、肛門期去勢、一次去勢(非エディプス期の性器的去勢)、エディプス期去勢と名づけられている。各段階において、適切な時期に適切な去勢がなされる必要があり、そうすることでその段階固有の昇華が果たされ、子どもは正常な発達を遂げることとなる。

臍帯去勢とは、出生時に臍の緒を切断される事態であり、もう母親の腹の中には戻れないものの、身体的な融合状態は対人関係へと展開し、新たに世界に生きる存在となることである。**口唇期去勢**は、先にも例示した離乳の過程である。母親の乳房を貪り食おうとする欲動が去勢されると、母乳の代わりとなる食文化に開かれると同時に、吸ったり噛んだりする口が言葉を話すツールとなり、言語や表情を通したコミュニケーションへと展開してゆく。**肛門期去勢**は、トイレット・トレーニングを通して果たされるものである。この過程を通して、子どもは母親から分離して自主性を獲得し、同時に有害な行いを禁止されるようになる。結果として、運動性を統御してそれを心地良い活

動に使えるようになる。**一次去勢（非エディプス期の性器的去勢）**は、性差を認識し、自分が有しているのは片方の性のみであることを受け入れ、もう一方を諦めさせることである。これによって、生殖の可能性を開き、子孫を残すことを担う生物界の一員となる。**エディプス期去勢**は、近親姦のタブーという掟を内在化させるものである。親と交じりたいという願望は封印されるが、これにより両親を巡る葛藤から自由になり、同世代の友人関係、異性関係へと可能性を広げることとなる。また両親の期待に応えることに専心するだけでなく、自分自身の欲望、願望を満たす方へと進展し、主体的な生き方を獲得する方向へ進むことに繋がってゆく⁵。

但し、去勢が執行されれば必ず昇華がもたらされるわけではない。去勢によってもたらされる欲動の象徴化が、倒錯や神経症性の抑圧を生じさせるということもある。そのようにさせず、昇華を引き起こす象徴産出的去勢を行うためには、去勢を執行する養育者もしかるべき去勢を受けている必要があると、Dolto, F.は再三強調している⁶。

それゆえ、ここでいう昇華において価値をもたらすのは、ほかならぬ去勢を執行する養育者である。子どもがそれまで直接的に満たしていた満足の供給をやめ、あるいはそのような満足の手段を禁じ、その代わりとなる象徴的な別の手段を提示してやる時、新しい手段の中には、新しい価値観も含まれている。不十分な去勢のために子どもが神経症、あるいは倒錯になるとすれば、それは、代わりとなる満足の道や手段が適切に提示されていなかったか、あるいは不適切な道が提示されてしまったと考えられる。去勢を執行する人間も去勢されている必要があると Dolto, F.が言う理由がここにもある。

6. 昇華の価値論の分類

ここまで何人かの代表的な精神分析家による価値論を見てきたが、以上のレビューを踏まえて、昇華において価値がどのようにもたらされるかを大別すれば、①内的審級の形成、②去勢、③自我自律性の機能、の三つに分類できることが分かるだろう。

①の内的審級とは、Freud, S.の場合は自我理想、Freud, A.の場合は超自我を指している。また、Chasseguet-Smirgel, J.の場合は、父親のファルスの内在化という表現がある程度で、何か特別な審級が形成されるとは記されていないが、同類のものと考えて良いだろう。これらはいずれも人間が成長する過程で、心の中に設けられる一つの構造、一つの心的装置である。これがひとたび形成されれば、理論的にはこの装置が外界を取り入れ、昇華のための心の作業を遂行することとなる。

次に、②の去勢とは、Dolto, F.の理論に基づいており、この場合去勢をもたらす他者がある価値を導入する担い手となる。昇華とはそもそも欲動の辿る運命が直截的で短絡的なものから現実を加味した、迂回路を経由する過程であり、現実原理あるいは解放機制に則っているものである。短絡路を断念させるきっかけを作り、新たな価値を備えた迂回路の可能性を提示するのが、去勢という他者の介入である。

最後の③自我自律性の機能とは、Hartmann, H.の理論に依っている。独立した自我が自律性や健

⁵ Chasseguet-Smirgel, J.の昇華理論とは、Dolto, F.の言うエディプス期去勢に特化した理論と言うことができるだろう。

⁶ Dolto, F.の臨床実践の報告をみれば、“禁止をしつつも、子どもが満たしたい欲望・願望をしかと理解し、認めてやる”ということも象徴産出的去勢のためには同様に必要なことと言えよう。

康さを備えており、価値基準や衝動（欲動）を導く目的も把握しているという考えである。しかしながら、この考え方は、仮説としてはシンプルかつ明瞭であるが、昇華の価値論を語る上では、いささか不適切であるように思われる。というのも、外界の価値基準は、時代や地域に大いに依存するものであり、遺伝的本能にせよ、ある種の絶対的な基準を備えているとは想定しがたいからである。理論的に言って、環境からの影響を受け続ける昇華を語るためには、外的世界との関わり、あるいは外界を取り込むメカニズムの想定は避けて通れないのではないだろうか⁷。それゆえ、筆者は、以上の三分類のうち、③を除いた二つの価値論が有用であることを主張したい。

ここまでの議論を踏まえて最後に、価値論についてはとりわけ語っていない他の昇華理論が、これらの価値論とどの程度適合するかということを検討してみたい。これに関しては、むやみに①あるいは②の発想を他の分析家の昇華理論に当てはめてみるのではなく、誰の昇華理論と誰のそれとが類似性があるのかを踏まえた上で、価値論についても再検討するという手順を取りたい。このような作業をする必要があるのは、ひとえに、各々の分析家が異なる理論モデルをもって昇華の理解を提唱しているからである。「昇華」という言葉は同じでも、指しているものが全く違う場合もあり、それゆえ当然、価値論に関しても同等に扱えないのである。

7. 昇華理論の類型化

昇華を考える上、大きく分かれるのが、心のメカニズム、つまるところ Freud, S. の『自我とエス』⁹で提唱された第二局所論（自我・エス・超自我の三つの審級で構成される心の理解）を踏襲しているか否かの違いである。これを踏襲している場合、昇華の担い手が自我になり、そうでない場合、すなわち自我の存在をさほど強調していない場合とは前提が大きく異なる。それゆえ、第二局所論を基盤に据えているか否かが最初の分類基準となる必要がある。本稿では、第二局所論を据えている心的モデルを「1923 年モデル」と命名しよう。自我心理学の精神分析家は必然的にここに含まれる。

次に、「1923 年モデル」以外の昇華理論を見ると、概ね『性理論三篇』⁷で立ち上がった Freud, S. のリビドー発達モデルを基盤に据えている。これを「1905 年モデル」と命名したいが、そのどちらにも含まれない昇華理論が存在する。代表的なものが、償いとしての昇華理論を打ち立てた Klein, M.（「芸術作品および創造的衝動に表れた幼児期不安状況」¹² など）と、その論文に出てくる素材を踏まえて〈物〉との関連で昇華を理論化した Lacan, J.¹⁴ である。

「1905 年モデル」の中をさらに詳しく分類してみると、一つの分岐点がエディプス期以前の昇華を認めるかどうかという点に見出せる。認めない分析家としては、エディプス・コンプレックスの克服こそが昇華であると考えている Chasseguet-Smirgel, J. がまず挙げられる。その他の「1905 年モデル」の昇華は、Dolto, F. はもちろんのこと、いずれも前性器期欲動（口唇期欲動、肛門期欲動、

⁷ これについては、自我心理学が前提にしている“自律した自我が生来的に人間の中に存在している”という発想に向けられている他学派的批判が参考になるだろう。たしかに Hartmann, H. は自律的な自我が最初から存在していることを根拠と共に示しているが、このような考え方は、「他者によって自らが規定される」、あるいは「他者との相互関係によって初めて自らが形成される」といった Lacan, J. らの考えとは対立するのである。そうした人間の捉え方は多くの精神分析的理解に通底しているものであり、外部の価値観が影響してくる昇華理論を考える際にも欠かすことのできない視点と言えるだろう。

男根期欲動など)の昇華を想定している。少しややこしくなってしまうが、先の「1923 年型」に該当する昇華理論をよく見てみると、その多くが前性器期の欲動の昇華を認めていることが分かる。実はこの問題は自我心理学の中でも初期の頃から論じられてきた問題であり、Deri, F.などは「昇華されるのは前性器期衝動であり、性器期衝動はただ享楽(enjoyment)の目的だけに使われる」と考えている³⁾。それに対して、Hartmann, H.は「深く立ち入らない」(p.26)と言いつつも、前性器期、性器期の両リビドーが昇華される考えを示している¹⁰⁾。また初期(償いの理論が提示される以前)の Klein, M.¹¹⁾や Menninger, K.¹⁸⁾は、様々な職業が固着した欲動のどれが昇華された姿であるかを、具体例を挙げて述べている。反対に、Freud, A.⁹⁾は「超自我が形成されて初めて昇華が可能である」と述べていることから前エディプス期の昇華は認めていないと見なすべきだろう。というのも Freud, A.が準拠している古典的な精神分析理論では、超自我の形成はエディプス・コンプレックスの消滅によって達成されるからである。Klein, M.¹²⁾や Lacan, J.¹⁴⁾は、欲動論から少し離れた地点で昇華について考えているので、差し当たり区別は留保しておこう。

以上の考察を踏まえ、さらに価値論に関する先の分類を付け加えると、次のような表にまとめることができる (Freud, S.およびその読解を行った Nasio, J. D.の昇華理論は含んでいない)。

表. Freud, S.以後の昇華理論の類型

心理モデル	前エディプス期の昇華	精神分析家	価値論
1905 年モデル	なし	Chasseguet-Smirgel	①
	あり	Dolto	②
		Klein(初期) Laplanche Lagache	？
1923 年モデル		Fenichel	不問
		Deri Menninger	？
		Hartmann	③
	なし	Freud, A.	①
その他	—	Klein, Lacan	(①、②)

*注 ①内的審級の形成
②去勢
③自我自律性の機能

本稿では、論じることができなかった精神分析家も、その理論形態に応じて、表に書き込んでいるが、そのうち、初期の Klein, M.¹¹⁾、Laplanche, J.¹⁷⁾そして Deri, F.³⁾、Menninger, K.¹⁸⁾に関しては、価値論がどのように位置づけられるかは、文献からは読み取れないため、「?」と記してある。一方、Lagache, D.¹⁵⁾は本稿の考察には収まりきれないほど多角的に昇華の価値論について議論しており、また単一の昇華モデルを提示しているわけではないため、「?」と表記することとした。

その他の Klein, M.¹²⁾、Lacan, J.¹⁴⁾ に関しては、明言しているわけではないが、その昇華理論からは①と②の萌芽見いだせるため、上のように記した。Klein, M.の償いとしての昇華やそれをさらに理論的に進めた Lacan, J.の昇華は、簡略化して述べると、原初的に喪失してしまった根源的対象を復元し、その代替物を生成する心的プロセスである。Klein, M.は度々「その時の体験が後の人生のひな形となる」という旨を述べている。それが何かしらの心的審級とは述べてないが、価値論①の過程と類似したものがある。そして原初的な対象喪失についても Dolto, F.のいう去勢②と類似性があると考えられるだろう。対象喪失に伴い、それまでの満足の在り方を奪い、別の満足の方法が必要になってゆくからである。

価値論について正面から論じられていない昇華理論について、これらの点を考察することは今後の大きな課題である。

8. おわりに

本稿では、昇華理論の価値に関する問題に触れている分析家の見解をレビューし、理論的な識別をした上で、それらがどのような配置になっているのかをまとめる作業を行った。昇華は曖昧で不明瞭な概念として知られているが、このような見取り図が今後、昇華理論およびそれをとりまく精神分析的な思考を探究する際の一助となることが期待される。

文献

- 1) Bibring, E. (1943): The Conception of the Repetition Compulsion. *Psychoanalytic Quarterly*, 12, 486-519.
- 2) Chasseguet-Smirgel, J. (1975): *L'idéal du Moi. Essai sur la Maladie d'Idéalité*. Tchou, Paris
- 3) Deri, F. (1939): On Sublimation. *Psychoanalytic Quarterly*, 8, 325-334.
- 4) Dolto, F. (1984): *L'image inconscient du corps*. Seuil, Paris
- 5) Fenichel, O. (1945): *The Psychoanalytic Theory of Neurosis*. W·W·Norton & Company, New York & London
- 6) Freud, A. (1936): The Ego and the Mechanisms of Defence (trans). International Universities Press, New York
- 7) Freud, S. (1905): Three Essays on the Theory of Sexuality. In S.E.7. The Hogarth Press and the Institute of Psychoanalysis, London
- 8) Freud, S. (1914): On Narcissism: An Introduction. In S.E.14. The Hogarth Press and the Institute of Psychoanalysis, London
- 9) Freud, S. (1923): The Ego and the Es. In S.E.19. The Hogarth Press and the Institute of Psychoanalysis, London
- 10) Hartmann, H. (1955): Notes on the Theory of Sublimation. *The Psychoanalytic Study of the Child* 10, 9-29.
- 11) Klein, M. (1923): Early Analysis. In Klein, M. (1975): *Love, Guilt and Reparation and Other Works 1921-1945*. The Free Press, New York

- 12) Klein, M. (1929): Infantile Anxiety-Situations Reflected in a Work of Art and in the Creative Impulse. In Klein, M. (1975): Love, Guilt and Reparation and Other Works 1921-1945. The Free Press, New York
- 13) Lacan, J. (1938): Les complexes familiaux dans la formation de l'individu. In Lacan, J. (2001): Autre écrits. Seuil, Paris
- 14) Lacan, J. (1959-60): Le séminaire livre VII, L'éthique de la psychanalyse. Seuil, Paris
- 15) Lagache, D. (1962): La sublimation et les valeurs. In Lagache, D. (1984): De la fantaisie à la sublimation, Oeuvres V. PUF, Paris
- 16) Laplanche, J. & Pontalis, J-B. (1967): Vocabulaire de la psychanalyse. PUF, Paris
- 17) Laplanche, J. (1980): Problématiques III, La sublimation. PUF, Paris
- 18) Menninger, K. (1942): Love Against Hate. Harcourt, New York
- 19) Nasio, J-D. (1988): Enseignement de 7 concepts cruciaux de la psychanalyse. Rivages, Paris

本稿の執筆にあたって、平成 26 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の助成を受けた。

（日本学術振興会特別研究員 臨床心理実践学講座 博士後期課程 3 回生）

（受稿 2014 年 9 月 1 日、改稿 2014 年 11 月 20 日、受理 2014 年 12 月 26 日）

昇華の価値論

堀川 聡司

本稿は、精神分析固有の概念である昇華理論についてその理論的な探求を目指したものである。昇華理論は、メタサイコロジー的なメカニズムと価値論について曖昧さがあると言われている。本稿はその両方に関わる問題、すなわち「ある外的な価値を個人がどのように取り入れ、昇華の過程に使用するか」という点について、様々な精神分析家の見解をもとに考察している。Freud, S.、Nasio, J. D.、Freud, A.、Fenichel, O.、Hartmann, H.、Chasseguet-Smirgel, J.、Dolto, F.らを参照することにより、昇華の価値論には三つの型、すなわち①内的審級の形成、②去勢、③自我自律性の機能、が存在することが明らかになった。さらには、価値論については語っていない昇華理論に関しても、メタサイコロジーの視点から類型化し、どの価値論が適応できるかを検討し、図示することを試みた。

On the Value of Sublimation

HORIKAWA Satoshi

This article aims to elaborate the psychoanalytic concept of sublimation. Sublimation is a vague concept, especially in relation to its meta-psychological development and value. This article considers both of these, i. e., “How the individual interjects the external value and uses it for the process of sublimation.” From the works of Sigmund Freud, Juan-David Nasio, Anna Freud, Otto Fenichel, Heinz Hartmann, Janine Chasseguet-Smirgel, and Françoise Dolto, three modes of the value of sublimation are presented: 1) formation of the internal instance, 2) castration, and 3) function of the ego autonomy. The other theories on the sublimation, which do not deal with the value, are then considered with these three modes, and presented in a table.

キーワード： 昇華、価値、自我理想、去勢、自我自律性

Keywords: Sublimation, Value, Ego-ideal, Castration, Ego autonomy